

2015年3月26日

石田、十河

1. 概要

昨年に引き続き、琉球大学の協力を得てデザインスクール in 沖縄（京都大学－琉球大学合同デザインスクール）を開催した。今回は空路での沖縄入りとし、合同デザインスクールの期間を2日間から3日間に延長した。これに伴い、前回は洋上で実施したファシリテーション講習等を那覇市内にて実施した。

2. 日程・スケジュール

2014年11月21日（金）～11月25日（火）

11月21日（金）	関西空港から飛行機で那覇空港へ 翌日からの合同デザインスクールに向けてのファシリテーション講習、オリエンテーションを実施
11月22日（土）～ 11月24日（日）	京都大学－琉球大学合同デザインスクールに参加
11月25日（月）	フィールドワークを実施 夕刻 那覇空港から飛行機で関西国際空港へ

3. プログラム

3.1 ファシリテーション講習（京大-琉大合同）（11月21日 14:30～17:30）

(1) 講義「ファシリテーションとは？」（講師：中川）

- ・ファシリテーションって何？
- ・ファシリテーターがすること
- ・ファシリテーターの心構えとファシリテーションの手法・ツール

セッションの手法・ツール

- ・参加者の能力が発揮できる環境とは？
- ・環境を整えるには、どうする？

(2) 演習（講師：中川）

ファシリテーションの基礎スキルであるコミュニケーションの技術について、ブラインド・ウォーク、アクティブ・リスニング（積極的傾聴）などを通じて体験的に学習した。



ファシリテーション講習の様子

(3) 講義「デザインとは？」(講師：十河)

問題発見と問題解決のための基本的なデザインプロセス、およびブレインストーミングの方法について講義を行った。また、その実践として、翌日からの合同デザインスクールの準備を兼ねて、スクール当日のワークショップのプロセスのデザインを各グループで実施した。

3.2 オリエンテーション (京大のみ) (11月21日 19:30~21:00)

(1) 講義「沖縄を理解する」(伊沢先生)

沖縄の現状を各種の統計データなどから理解する。

(2) 京都大学ー琉球大学合同デザインスクールでの京大生の役割について、説明を行った。

3.3 京大ー琉大合同デザインスクール (11月22日~24日)

(於 琉球大学 千原キャンパス 大学会館)

概要：今回は、沖縄県で長らく話題に取り上げられている「雇用」と「健康」を2大テーマとし、下記の5つのテーマに取り組んだ。雇用をテーマとするグループは1テーマ2グループずつの計6グループ、健康をテーマとするグループは1テーマ1グループの計2グループとなった。参加者は8グループ(1グループ5~6名)に分かれ、各グループには1名または2名のデザイン学本科生が参加し、ファシリテーターとしてグループ内の議論をリードした。



グループワークの様子

<雇用テーマ1: 過去と未来のキャリアデザインガイドブック>

目的：時代ごと、世代ごとに働くとはどんなものであったのかを比較・検討することで働くとはどういうことかを見直し、これからの時代の働き方を考える。

<雇用テーマ2: 理想の沖縄キャリアパスマップ>

目的：沖縄にはどんな職業があるのかを調べ、職業同士の関係を分類してキャリアパスのマップを作成することで、自分にとっての理想のキャリアパスの位置を理解し、これに向かう指針を持てるようになる。

<雇用テーマ 3: 沖縄で学生と企業が win-win なインターンシップデザイン>

目的： 地方県／離島県である沖縄でインターンシップを行うにあたり、学生視点および受入れ企業視点のニーズや問題点を調べ、その解決策を模索し両者にとって魅力のあるインターンシップを考える。

<健康テーマ 1: 沖縄で食育を当たり前にするために必要なこと>

目的： 現代沖縄の不健康な食文化を改善するために、食育についての啓蒙活動を行う。無理なく、効果的に、沖縄の日常に食育が当たり前のようにあるための方策を考えて、食事から健康を目指す。

<健康テーマ 2: 沖縄人でも歩くのが楽しくなる仕掛けづくり>

目的： 基本的に沖縄人は近距離でも車を多用し、歩くのを嫌って避ける事が多く、慢性的な運動不足になっている。これを解消するため、沖縄人でもゲーム感覚で歩くことを進んでやるような仕掛けを考える。

[1 日目: 11/22(土)]

9:00-9:30, 受付

9:30-12:20, オープニング、テーマ毎の基調講演、質疑

12:20-13:20, 昼食

13:20-15:00, グループワーク 1 回目

15:00-15:20, コーヒーブレイク

15:20-18:00, グループワーク 2 回目

[2 日目: 11/23(日)]

9:30-19:00 フィールドワーク or 会場にてグループワーク

[3 日目: 11/24(月,祝)]

9:30-12:00, グループワーク

12:00-13:00, 昼食

13:00-14:30, プレゼン準備

14:30-14:50, コーヒーブレイク

14:50-19:00, 発表会、講評、反省会

<発表タイトル>

雇用 1-1: 「ウミガメ放流プロジェクト」～U ターンのキャリアをデザインする～

雇用 1-2: if…キャリアゲーム(OKINAWA ver.)

雇用 2-1: うちなーんちゅのための"Life Work Guide Book" ～あなたの道標をさがして～

雇用 2-2: 近未来予想図～新卒 3 年で失敗しないために～

雇用 3-1: Project Design のデザイン

雇用 3-2: インターンシップの問題点に関する一考察

健康 1: 沖縄で食育を当たり前にするために必要なこと

健康 2: フューサーがマブヤーでながらウォーキング

4. 参加者

■ファシリテーション講習

<学生>

京都大学デザイン学本科生 12名

琉球大学理工学研究科情報工学専攻 修士 2名 (2年生1名、1年生1名)

琉球大学法文学部 学部生 1名 (4年生1名)

<教員他>

教職員 10名 (京大7名、琉大3名)

■京大-琉大合同デザインスクール

<学生> 34名

京都大学デザイン学本科生 12名

琉球大学理工学研究科情報工学専攻修士 8名(1年生4名、2年生4名)

琉球大学工学部情報工学科学部生 12名 (4年生6名、3年生4名、1年生2名)

琉球大学法文学部 学部生 1名 (4年生1名)

興南高等学校 1名 (2年生1名)

<教員他> 23名

教員 9名 (京大5名、琉大4名)

職員 2名 (京大1名、琉大1名)

ファシリテーター 1名 (京大)

NPO 2名 (講演者1名、コーディネーター1名)

社会人協力者 9名 (企業4名、行政1名、教員2名、栄養士2名)

5. 参加者の所感

本科生および教職員に合同デザインスクールでの活動の内容と所感について意見を求め、計14名から回答を得た。

学生1 (情報学研究科 修士1年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

今回のデザインスクールでは、京都大のデザイン学の学生は主にファシリテーターとして参加していた。ファシリテーションにおいては、議論の様子から参加者の内面を理解して個々の意見をうまく引き出すことで議論を活性化させることが重要と考えられる。また、適度に方向性を示すことで、参加者が目的を見失わないよう、ある程度議論をコントロール

する必要がある。そのために、ファシリテーターがどのように振る舞えばよいのか、どんな話を投げかければよいのか、講習を通して頭ではわかっていたつもりでも、実際に行ってみるとうまくいかず、ファシリテーションの難しさを実感した。また、街頭にて現地の方を対象にインタビューを行ったが、インタビューのノウハウについては知っていたものの、街中で知らない人にいきなり話しかけるといのは予想以上に難しく、インタビュー内容も非常にセンシティブであったため、期待していた成果が得られなかったのが反省点として挙げられる。

印象に残った点としては、琉球大学の学生について、ワークショップに対する積極的な取り組み方は勿論のこと、率先して食事会等を企画してくれるなど、我々を非常に歓迎してくれているように感じられ、素直に嬉しかった。また、少なからずの学生が、ペンタブレットなどを用いて絵が描けることに非常に驚いた。彼らは大した能力ではないかのように謙遜していたが、自分のイメージを他者に共有するための手段として、イラストやデッサンは非常に有効であり、それらの能力を自然と育めるような人的環境が整っていることが、羨ましく思われた。

学生 2 (教育学研究科 修士 1 年生)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

「言うは易し行は難し」という故事成語がありますが、先日のデザインスクールはまさにその言葉を痛感した 3 日間でした。研修初日の講習でファシリテーターに求められる役割について様々なことを学びましたが、当日はそれらの教を十分に実践することができませんでした。とりわけ反省すべきことは「計画力」です。計画性が無かったために、1 日目のアイデア出しが後になって無駄であると分かったり、2 日目までにまとめた案が最終日で急にボツになることなどが起きてしまいました。参加者の意見を踏まえた到達目標を初日に定め、その大目標から逆算して各日の小目標を立てていけば、3 日という時間資源をより有意義に活用できたのではないかと反省しています。

しかし上記にみる反省点はあったものの、最終的にはアイデアを 1 つの成果物として発表することができました。これはよき参加者との出会いの賜物であると考えています。琉球大学の学生はみな「行動力」に富み、積極的に知人・友人へ聞き込みを行って生の情報を提供してくれました。参加者は受け身で行動するのではなく、各自の人脈を活かして積極的に色々な人にインタビューをしてくれました。参加者の一人が「自ら行動しないとチャンスは巡って来ない」と話していましたが、今回のデザインスクールを通して改めて行動力の大切さを実感した次第です。

「デザインスクール in 沖縄」では、沖縄の大学生と社会問題について議論するという貴重な機会に恵まれたほか、京大のデザインスクール生との親睦をも深めることができました。しかし私の力不足が原因で、ファシリテーターとしての務めを十分に果たせなかったことが心残りです。次年度では国境を越え、更にハイレベルなデザインスクールが待っているので、日々の心掛けを通して自らの弱点を克服していきたいと考えています。

学生 3 (経理管理大学院 修士 1 年生)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

沖縄が抱える実社会の問題について、沖縄に出向き街を散策し、地元の学生と共に考え取り組む。これぞデザインスクールでしか体験できない学習経験を積むことができた。異なる分野を学習する学生同志がチームとなり、問題提起から問題解決まで取り組み、与えられた時間内で取り組んでいく。ワークショップを遂行していくために必要なファシリテーションスキルや技術を習得することができた。

また、ファシリテーターとしてワークショップに挑み、自分の傾向を知ることができた。一人の参加者でありながら、ファシリテーション行い遂行していかなければならない。私にとって難題ではあったがチームメンバーの意見に耳を傾け、時には立ち止まり今までの経緯を振り返る、二役を行うことで自分がワークに取り組む姿勢・傾向を知ることができたと思われる。

自分と異なる専門分野を持つ学生との取り組みは、課題を捉える視点、斬新なアイデアに触れ、互いに衝突し合うことでより深い問題解決へと繋がっていく。改めてデザイン学で学ぶ意義を再認識したワークショップでした。

学生 4 (工学研究科 修士 1 年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

京大・琉大合同デザインスクールでの活動内容は、沖縄滞在期間中の 3 日間、初めて出会う異なる文化圏の人々と共に、一つのテーマに対して取り組むというものであった。自分が取り組んだテーマは、「沖縄で学生と企業が win-win なインターンシップのデザイン」であったが、3 日間集中的に取り組んでいく中で、最終的にインターンシップそのものではなく琉球大学情報工学部の授業をデザインしたというのは非常に興味深かったと考えている。そのような意味で、京大・琉大合同デザインスクールにおいて最も印象に残ったことは、沖縄在住の人と共に一つの問題に取り組んだ、ワークショップのプロセスそのものにある。現地の琉球大学の大学生の知り合いをつたって、実際にフィールドに行って多くの人に接する方法は、結果を予想外の方向に持って行ってくれた。今回の取り組み方法は、今後のデザインスクールでの活動に役立てたいと考えている。

学生 5 (教育学研究科 修士 1 年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

これまでのデザインスクールにおけるイベントでは、プレーヤーとして活動に参加してきましたが、今回のグループワークではファシリテーターという異なる役割を持ってワークに取り組んだことで、ディスカッションに対する見え方が広がりました。また、プレーヤーとして参加していた際は深く考えていませんでしたが、ブレインストーミングや親和図

法等の手法の良さと悪さを実感でき、今後の活動に役立てられそうだと感じました。さらに現地の社会人の方にインタビューする機会を事前に用意していただいていたことで、机上の議論にとどまらず、より議論を深めることができました。

加えて、沖縄という京都とはやや異なる文化を持った場所で活動できたこともよかった点であると考えています。言葉や風土の違う環境に置かれたことで、視野が広がった状態でデザインに取り組みました。さらに、活動の合間に他の本科生とデザインについての議論を深めることができ、充実した時間を送ることができたと思います。

学生 6 (情報学研究科 修士 1 年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

今回の合同デザインスクールは、私の班のテーマが“沖縄の雇用”という普段触れないテーマであり、非常に難しかったです。また、今回京大生に求められていた役割が、ほとんど経験したことがない「ファシリテーター」といったこともあり、3日間、苦悩の日々でした。

しかしながら、班のメンバーとのディスカッションやフィールドに出て行ったアンケート調査を通じて、知識を深めると同時に、一つの作品にまとめあげられたのは、とても良い経験でした。残念ながら、私の班は優秀賞を決める投票では上位に入ることはできませんでしたが、今回の合同デザインスクールに協力してくださった社会人協力者の方から、後でこそっと「この班に投票しましたよ」と声をかけていただき、非常に嬉しかったと同時に、今回の活動をやってよかったと心から思いました。

学生 7 (工学研究科 修士 1 年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

合同デザインスクールでは、健康 2「沖縄人でも歩くのが楽しくなる仕掛けづくり」というテーマで活動を行った。1 日目は、基調講演の後、グループ内でのテーマ共有から始め、課題の周辺についてメンバー自身の経験などから発散し、意見を抽出することでアイデアの原型を定めた。2 日目は、午前中にフィールドワークを行い、ターゲットとして想定した方たちへのインタビューを通じて、現状の確認とアイデアに対する意見を集めた。午後には、収集した知見を基にしてアイデアの見直しを行い、具体的なアイデアにまとめた。3 日目は、提案するアイデアをいかにして伝えるかを話し合い、最終的に、アイデア実践のモデルケースを紙芝居調に表現した。

今回の合同デザインスクールの中で特に印象に残ったことの一つは、文化の差異に関する点である。課題について議論する中で、しばしば沖縄と京都で共通する箇所もあった。しかし、本質的な社会規模の要因に関しては、やはり文化やそれを取り巻く環境の違いを実感する場面が多く、困惑することもあった。一方で、グループワークで提案するアイデアの中に、沖縄の文化を積極的に取り入れたことについては、アイデアの具体化や、発表時の印象など、共感を誘うという点で有効であったと思われる。

また、ファシリテータを経験して強く印象に残ったのは、議論を活発化する上で、その方向性を具体化することが極めて重要であると実感されたことである。ある問題を考える際に、抽象的な内容のまま取り扱うようでは、ファシリテーションとは言えない。実際、私自身、この失敗を幾度か犯してしまった。これに対し、メンバーからの助言により、ターゲットを区分したり、具体的な事例からアプローチするよう方針を変えたことで、格段にアイデアが出やすくなった。このような知見は実際にファシリテータを経験することによってこそ得られるものであり、今後の糧として心にとどめておきたい。

学生 8 (工学研究科 修士 1 年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

本活動は、3日間のワークショップと、その前の事前講習（ファシリテーター講習、沖縄について）から構成されていました。前日にはありますがファシリテーションとは？ファシリテーターとしての心構えとは？を聞いて、ワークショップへの緊張と恐怖が私の中で和らいだ感じが有りました。3日間のワークショップでは、健康と雇用という若干テーマとして重い（考えていて辛くなる？）ものだったのですが、しかし社会問題を考えていくうえで大事なことでもあるので、大事なことを気楽に議論できる（心苦しさをあまり感じずに議論を進めていくという意）ように場を作ろうと考えて、進めてみました。参加してくれたほかの学生さん方がとても気さくに、活発に話し合いを進めてくださったので、楽しみながら問題を考えることが出来たので、良かったなあと思っています。

学生 9 (工学研究科 修士 1 年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

今回のデザインスクールは忘れられない苦い経験となった。私の班では、県内や県外の就職の話から人生設計の話になり、その中でも、人生のターニングポイントに注目した。何人かへのインタビューから、多くの人が人生プランを計画的に実行するよりは、あまり深く考えず生きてきた人が多かったことが分かった。そこで、人生の転機やハプニングのような予想できない要素を考える機会が必要だという方向性からちょっとしたキャリアを考えるゲームを作成した。

ワークショップを終えて、議論をうまく進めることの重要性や、メンバーの意識を統一させるということの重要性を激しく実感した。このデザインスクールでは、3日という制約のもとで議論をまとめて発表する段階に至らなければならない。よって、効率よく議論を進めなければ時間が足りない。そういった意味でもファシリテーターがいかに機能するかで成果は大きく変容しうる。普段の活動で議論がうまくまとまっているのは、先生や他のファシリテート力のある同期のおかげだということが実感できた。実際に限られた時間でアイデアを実践していくには、議論を何時間もただただ続けていては駄目で、速くアイデアをまとめてそれを実践していかなければならない。

班の人たちには迷惑をかけてしまったかもしれないが、こうしたいろんなことを実践的

に学ぶいい機会だったと思う。今後は、まず目的を明確にして、みんなの意識をひとつにすることを大切にファシリテートしていきたい。

学生 10 (情報学研究科 修士 1 年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

フィールドワークの一環として街頭アンケートをやることになり、今までやったことが無かったので緊張しましたが、出会った琉大の学生さんが皆いい人で快く応じてくれたので非常に助かりました。アンケートの目的は、我々が話し合う中で出てきた沖縄県民のもつ就職に対する独特な意識（県内志向）というのを確認することだったのですが、実際に多くの方が県内で就職をすることを希望していることが分かりました。

事前準備として洗い出された問題を、実際にフィールドワークで確認し、解決策を考えるという一連のプロセスを通じて、非常に有意義な経験ができたと感じています。

学生 11 (教育学研究科 修士 1 年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

合同デザインスクールでは、琉球大学院生・京都大学院生・一般参加者からなる少人数チームで、地元の琉球大学院生からでてきた問題を解決するためのデザインを試みました。その際、ファシリテーターを設け、ディスカッションと大学構内でのインタビューを中心にプロジェクトを進めていきました。3日間という短い期間でしたが、その間にとっても多くのディスカッションをしました。その中で特に印象に残っていることは、琉球大学院生の地元志向が強いことと家族の近くに暮らすことに重きを置いていることでした。このような基本的な部分での考えが異なっていれば、それを解決するための最適なデザインも異なってくることを肌で感じることができました。

学生 12 (情報学研究科 修士 1 年)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

A joint design school event with Ryukyu University this year was very interesting and productive for me, I believe. I was a sub-facilitator trying to find a solution that would enable businesses to engage with students by internships resulting in a win-win situation.

I cannot stress enough, but the introduction lectures, especially the one on the background of Okinawa was extremely interesting and gave me a lot of inspiration and food for thought. Without especially the last one, it would me much harder especially for me, a person who do not have the same level of background on Japanese history, to do anything. In addition to that, having communication with the people who live in

Okinawa helped me realize even more that there exist a gap between Okinawa and the rest of Japan and Japan is full of its own internal problems as well.

Workshop itself went really smooth. I believe that was because organization both from Kyoto University side and Ryukyu University side were perfect. Because of presence of PBL and such workshops in the curriculum, we have become much more adept at finding problems, root causes of problems and getting out solutions with the following post-processing. Even in the case when we had the roles of mostly “supervisors” and “facilitators” as this time, the familiarity with the process helps us to produce solutions to different problems, even outside of our main specialty.

Workshops, such as this, at the same time give us an opportunity to have a small break from current specialty research, while being an almost perfect environment to hone our problem-solving skills. I am very grateful for the Kyoto University design school for providing of this opportunity.

教員 1 (デザイン学ユニット 特定准教授)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

スクール前日のファシリテーション講習では「デザイン」についてレクチャーを行い、当日は雇用テーマ 2「理想の沖縄キャリアパスマップ」にサブファシリテータとして参加した。開催期間が昨年より 1 日延びたことでじっくり議論できたように感じた一方、時間に余裕ができたことで緊張感が少なくなり、ついだらだらと議論をしたり、フィールドワーク中に次の一手をどうしようかと考え込んで時間を無駄にしてしまったように思う。時間管理の重要性を再認識させられた。

今年は海路による沖縄入りを中止し空路としたことで、「洋上ワークショップ」がなくなった。ネットに繋がらない大海原で、26 時間、デザインやファシリテーションについて一緒に学び・考える以外にすることがないという状況はある意味貴重で、今年はそのような本科生同士が打ち解ける機会が失われるのではないかと心配していたが、杞憂だったようである。スクール終了後の打ち上げでの京大生、琉大生の和気あいあいとした姿が印象に残った。

教員 2 (デザイン学ユニット 特定准教授)

(1) 合同デザインスクールでの活動の内容と所感

今回の合同デザインスクールでは、「沖縄人でも歩くのが楽しくなる仕掛けづくり」にサブファシリテータとして参加した。メインのファシリテータが京大側の学生だったため、できる限り学生のファシリテーションを尊重しつつ、詰まったときにサポートする形態をとりながらグループワークを進めていった。全般的に的確な論理展開でファシリテーション

が行われていたが、参加者の話をしっかりと聞くことを重視しすぎたためか、時間配分がうまくいかなかった点が反省材料である。原因として、タイムキーピングへの意識が弱かったことに加えて、参加者へのタスクの指示が曖昧だったことが挙げられる。このような点を踏まえると、来年度以降も京都大学の学生がファシリテータを務めるのであれば、タイムキーピングや的確な指示だしといった基本スキルの反復練習がファシリテーション講習で必要となりそうだ。また、グループのメンバがメインのファシリテータ以外が全員情報系の学生だった点も反省材料である。情報系の学生だけだったため、議論はスムーズにいき、早々に現実的なプランに落とし込めたが、その反面、意外性のあるアイデアに発展しなかったのは残念だった。これは多様な分野からなる京都大学の学生がファシリテータを務めた弊害であるが、来年度は分野バランスも考慮してグループ分けを行いたい。

ここまで反省点ばかり述べたが、今年から 3 日間に延びたことで、フィールドワークや発表準備を含め余裕をもって行えたこと、また、京都大学と琉球大学の学生間で交流する時間を多くとれた点は良かったと思う。特に後者は学生にとってはフィールドワーク以上に現地の情報や習慣を発見する良い機会になっていたように思う。

現地で直前まで準備していただいた琉球大学の先生方、そして、現地を案内してくれた琉球大学の学生には何から何までお世話になり、この場をお借りしてお礼申し上げたい